



三日目の昼。

ひどい雨音が響く中、スミレの部屋の前へ行く。

朝にはなかったタオルとトレーが出されていた。

起きたのだろうか、ノックをし、声をかける。

「スミレ、起きていますか？」

「ああ」

「おはようございます」

「……おはよう」

「ご飯食べてくれたんですね」

「君があんなことを言うから」

「やっぱり毒の心配をしていたんですか？」

「だって、僕にこうしてくれる理由がわからない」

「言ったじゃないですか。けが人を放っておけないだけで  
すよ」

「本当にそうなんだね」

「はい」

「おせっかいだ」

「自分でもそう思ってます」

扉越しで、スミレが少しだけ笑ったような気がした。

「雨、止みませんね。ふもとへおりた日に聞いたのですが、  
この地域はほとんど雨が降らないそうです」

「これだけの大雨が降るのは珍しいってことか」

「そうですね。そちらの部屋は雨漏りしてないですか？」

「問題ないよ」



「よかった。寒くもないですか？」

「<sup>うわ が</sup>上掛けを用意してくれただろう」

「使ってくれてるんですね」

「……これだけの雨じゃ、マリーが言ってた流星群は見れないね」

わざと話題を変えたのだろうか。

スマレの照れ隠しが見えた気がして、少し笑ってしまう。

「流星群、残念ですね。見てみたいんだけどな」

「マリーも見たことない？」

「はい。知識として知っているだけで、実際にはないんです」

「そっか」

「流れ星に願いごとをすると叶うっていうお話は知っていますか？」

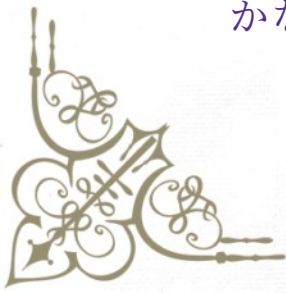
「うん」

「スマレなら、なにをお願いしますか？」



「それじゃあ、そろそろご飯を作りますね。スマレも食べますか？」

「さっきパンと果物を食べたから、スープだけ、もらえるかな」







「もちろんです！ 待っててくださいね」

調理台へ行き、昨日作ったスープを温めると、いつものように扉の前に置いた。

「お待たせしました。私はロフトにいますから、なにかあれば呼んでくださいね。雨の音がすごいけど、聞こえると思います」

「わかった」

「星は見えませんが、スマレの願いごとが叶うといいですね」

自分用にパンを切ってから、スープとともに持ってロフトへあがる。

スマレとの会話が少し増えた気がして、うれしかった。ご飯を食べながら本を読んでいたら眠くなってきたので、少しだけうたた寝することにした。





その日の夜。

地面が揺れていることに気づいた。

そのあとすぐ、ガラガラという大きな音が周囲に響く。

音に驚いたのか、マリーが駆け足で階段をおりてくる音をする。





「スマレ、さっきの音、なんでしょうか」

彼女がノックもせずに話しかけてくるのは、はじめてだった。

「大雨のせいで、山が崩れたのかもしれない。家は平気？」

「……はい、大丈夫そうです。あの」

「なに？」

「今日はここで寝てもいいですか」

「そこにベッドがあるの？」

「ない、ですけど」

「床で寝るつもり？」

「ええと、その……、こわくて」

「顔も見ただことない男のほうが、よっぽどこわいだろ」

「そんなことはないです。スマレとは何度も話してますし、一人より、誰かの傍のほうが安心できます」

「ドア越しでも？」

「ドア越しでも、です」

「君がそうしたいなら、すればいい」

「はい」

そのあとに続く言葉は、なかった。

雨音がひどいのに、マリーが扉に寄りかかった音がはっきりと聞こえる。

僕もなんとなく扉まで寄り、背を預けて眠りについた。

